

朝鮮王朝における政治と思想をいかに研究すべきか

朴 鴻圭

今日の報告の内容を変更しました。もともと『国家学会雑誌』に掲載された修士論文を中心に報告しようと思いましたが、あまりに細かい内容なので、皆さまにとっては面白くないし、私にとっては勉強にもならないと思ったからです。それで今日は、これから私が研究していく課題、問題意識を整理して先生方のご意見、ご指摘をうかがいたいと思います。

全体の内容は五つに分かれていて、一つ目は「東アジア」とは何かということを考えてみます。二つ目は、朱子学とは何か。それをふまえて三つ目に朝鮮王朝全

体、五百年にわたりますが、その政治と思想をいかに研究すべきかということです。四つ目は、私の修士論文のテーマだったもので、もともと報告するつもりだった内容ですが、朝鮮建国期における政治と思想の問題。最後にその後の朝鮮における政治と思想の流れをざっと説明していきたいと思います。

一 「東アジア」という視点

この「東アジア」という言葉は、二十世紀の末からさまざまな意味で使われるようになりました。歴史学

ではいうまでもなく、政治学・経済学・哲学の分野においても、「東アジア」という言葉が頻繁に使われてきました。その中でも、最も目立つのが「衝突」論の見直しだと思いますが、その「衝突」論とは何かというと、別に珍しいものでもなく、十九世紀後半以来の西欧文明との衝突、そして西洋の衝撃に対する東アジアの対応といったことを中心に東アジアをみる視点です。そこでは東アジアは伝統的なものとして捉えられ、その克服がまさに近代化とみなされたため、東アジアというのは負のイメージに覆われた言葉でした。これに對して、一九八〇年代以来に見直しがなされて、この負のイメージから脱して肯定的に捉えようとする視点が出てきたわけでありです。

その中の一つが「儒教文化圏」という言葉です。韓国・台湾・香港・シンガポールにおける経済発展に儒教的なもの支えがあったということで、例えば家族集団主義とか倫理規範の重視などのプラス的要因があつてこそ、近代化が達成できたというような見方です。そこからさらに「儒教資本主義」という言葉まで

生まれました。そのような観点に対して、溝口雄三氏によりいくつかの疑問点が出されました。まず議論上の問題として、都合のよいところだけをひっばつてきて、都合の悪いところはそのまま放っておいているのではないか、それから「東アジア」という共通点のみに重点が置かれて、それを構成する諸国間の差異が無視されているのではないか、という指摘です。それに対する一つの提案として溝口氏が出したのが、文化圏内にある諸国間の比較ということですが、諸国間の差異を比較せず、ただ共通点ばかりを議論するのは適切ではないということですが、「儒教文化圏」内の共通性と差別性、それを社会・文化・政治などのいろいろな面で探求していくことを提案しました。つまり「儒教文化圏」内の諸国が同じ圏内の他国の特質を相対的に説明することによって、それぞれが自国の社会・文化・政治の伝統を正しく認識することを溝口氏は主張したわけでありです。

しかし、こうなると問題は何かといえば、氏の提案は結局以前からあつた東アジアの「事実」をより詳し

かということになると、まだ答えはありません。そのような視点に立つて研究を進めていく中で答えは出てくると思います。

さて、こういう視点を踏まえて、前近代つまり近世の東アジアとは何だったのかということを考えてみます。近世という言葉は扱いにくいです。規定する内容によってその意味が違いますが、溝口氏の説に全く同調するわけではないのですが、ひとまずそれを手がかりにしてみます。資料①をご覧ください。これは、東アジアの諸国に存在する、社会相・時代相の歴史的な枠組みの上での大きな共通項を見出すための試みです。色が薄い部分の萌芽過程あるいは転換期があつて、それから濃い部分の近世が始まるわけですが、この近世というのは、中国では十世紀、朝鮮では十四世紀、日本では十七世紀という時間差をともなつて、中国からみれば周辺に波及します。ここで特徴的なのは、この近世期に中国で朱子学が始まり、あるいは朝鮮・日本ではこれがそれぞれの近世期に至って、政治社会の場で受容され、それとともに儒教が民間に流布

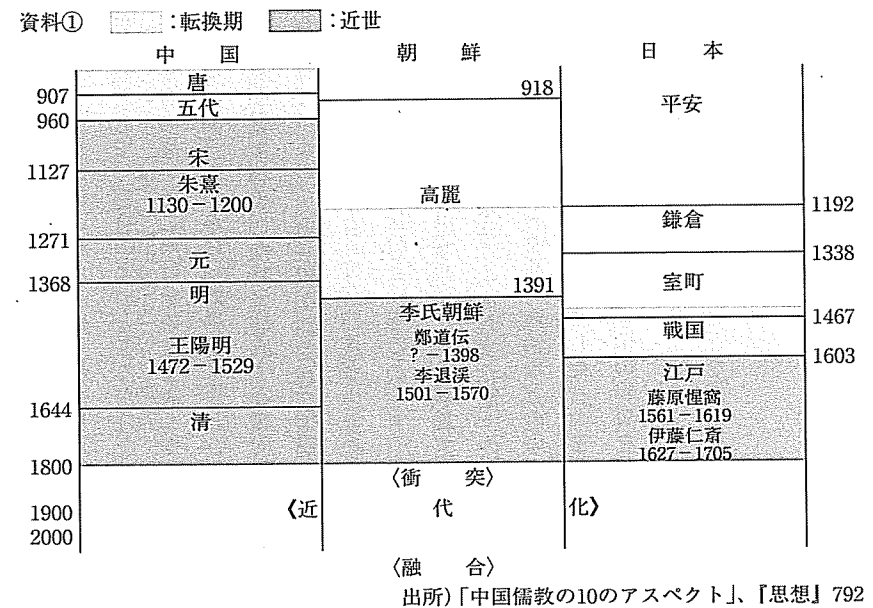
されはじめている、ということです。そのような共通項をもつて「東アジア」の近世を捉えようとする立場です。それを私なりに読み直すと、朱子学を東アジアに共通する政治的エートスとして捉えることになりました。次は「東アジア」における共通した政治的エートスとして考えられる朱子学とは何かについてお話しします。

二 朱子学とは何か

朱子学にはいろいろな面がありますが、ここでは政治の側面だけをみていきます。一言でいえば、朱子の政治思想は「修己治人」という言葉につきると思います。「修己」というのは心を修養する「心法」です。「天理」に従う「道心」と「人欲」に流れる「人心」との戦いの中で、善である「道心」が悪である「人心」に勝ち、それによって自己を修養することです。その具体的な方法が「居敬」と「窮理」ですけれども、「敬に居る」、つまりつねに心を引き締めて慎むこと、それから「理を窮める」、つまり天地自然や人間界の法則お

く究明することにはすぎないのではないかと、そうなる今まで歴史や哲学史の分野においてさんざんやつてきたわけで、今さら何の意味があるのか、ということですが。さらに、果たして過去の事実を認識することがそのまま現在性や未来性を担保するわけでもありません。むしろ現在性や未来性が薄れる嫌いさえあると思います。ですから、過去・現在・未来を束ねることができるとより巨視的な視点が要請されます。

そこで私が考えているのは、「衝突」論から「融合」論への視点の転換であります。それは、十九世紀後半から今日までを近代「東アジア」の第一幕として捉えることです。つまり、これからも持続して展開していく「東アジア」の第一幕としてみなす視点です。「東アジア」における近年の行き詰まり、近代化の機能不振といった事柄に対応していくために、西欧文明と東アジア文明との「融合」という視点が導入されるべきだと思ふわけでありまふ。そうすることによって、溝口氏が提案した過去に対する「正しい認識」というものが生きてくると思うのです。しかしそれが具体的に何



よび当為を探求することです。そのような修養の目標は「聖人」になることです。しかしそれにとどまらず、「聖人」に達した人が他人をも修養させ（「明其明德」）、「聖人」の域に至らしめること（「新民」）が「治人」です。その結果、もたらされるのが「成俗」、具体的には古の「三代」に実現した「太平」の世界です。

しかしこれでは、「修己治人」の朱子学の論理は政治を倫理へ還元し、政治の独自性がないのではないか、という疑問を今日の研究者に懐かせます。このような疑問に朱子はどのように応えるのか。そもそも朱子はなにゆえ「修己」を強調したのか。朱子の政治思想において「修己」はいかなる意味を持っているのか、という問題を少し考えてみたいと思います。そのためにはまず彼の歴史観にふれます。

中国において理想の時代であった古代王朝の夏・殷・周を「三代」というのですが、それ以降の歴史の展開は王朝交替を重ねる都度ますます悪くなって、自分が生きている南宋の時代は最悪の状態に落ちているとみなすのが朱子の基本的な考えです。このように歴

史はだんだん悪くなるのだとみるのが下降史観ですけれども、要するに歴史の世界は、彼の言葉によると、「私欲」に満ちており、利益ばかりをむさぼっている

「功利」の世界なのです。そこで朱子が志したのがまさに「三代」の理想的な世界です。それは歴史の世界を超えた理念の世界で、「人欲」に溢れる歴史の実像を超えた、不変的で絶対的な「天理」の世界です。そしてその世界への可能性を、朱子は「天命」による「人性」のみに求めています。だからこそ朱子は「修己」を強調したわけであります。朱子の政治論は「天理」と「人性」、すなわち「性・理」の政治論です。それは絶対不変的な「天理」の世界への可能性を「人性」に求める政治思想です。だから「修己」は決して倫理の次元にとどまるものではありません。それは政治に直結します。そもそも朱子は、理念の政治を志したからこそ「修己」を強調したわけですから。「修己治人」の論理の政治的な意味はそこにあります。それこそが朱子の政治思想の独自性であり、私はそのような朱子の政治思想を（朱子主義）と呼んでいます。

それでは、そのような朱子の政治思想において、刑政・賞罰・制度といった事柄はどのように位置づけられているのでしょうか。朱子における「政教」論から答えを模索したいと思います。

まず「政教」という言葉、より正確に言えば、「政」と「教」の意味なのですが、『孟子』尽心上に、「善政、不如善教之得民也。」という語があります。よい「政」（さしあたり政治といきましょう）は、よい「教」（おそらく教化といって差し支えないでしょう）によって、民の心を得るにしかざるという意味です。この語に対して、朱子は次のように注釈をつけました。「政は法度禁令を謂ふ、其の外を制する所以なり。教は道德斉礼を謂ふ、其の心を格す所以なり」と。ここで「外」というのは「心」と対になっているのをみても分かるように、人々の間の関係、つまり社会・政治の領域でしょうが、「政」はそれを制するもの、強いていえば、制度です。それから「道德斉礼」は、『論語』為政篇にある「道之以徳、齊之以礼」を縮めた語で、「斉」とは治めるの意味です。これをみると、朱子は孟子同様に、「教」の方に重点を

置いていることは確かです。しかも朱子の論理は「治人」＝「新民」＝「明其明德」なので、朱子における「治人」はもっぱら「教」を意味するのではないかというような気がします。そして、刑政・賞罰・制度の事柄は無視されているようにもみえます。しかし実際はそうではありません。「治人」、人を治めるのに両面があつて、一つが「政」で、もう一つが「教」です。つまり、「政」がなくては、「治人」は成り立たないと、朱子は考えています。要するに朱子が考えているのは、「政」と「教」を並行させることです。「治人」の両輪ともいえます。さらにいうと、朱子にとって、「政」は「治人」の前提・必要条件です。だからその存在を認めてはいるものの、それにとどまることを彼は認めません。「教」まで至つて、あるいは「教」と両立させて、はじめて、「治人」が成立するわけです。朱子は「政」より「教」に重点を置いたというのは間違いではありませんが、とはいっても、朱子が「政」を蔑ろにしたとか、あるいは否定的に捉えたというのは間違いです。あくまでも「政」と「教」は並行すべきだというのが

朱子の考えです。「政」無き「教」はありうべくもなく、「政」のみでは先ほどのような「三代」の理念の世界に到達できない、だから「政」にとどまらず、「教」まで行うことによって、はじめて到達可能だというのが（朱子主義）、朱子の政治思想における「政教」関係であります。

今までの話を中国思想史の脈絡からみますと、「周礼型」政治論と「大学型」政治論という概念で捉えることができます。それは小島毅氏の説ですが、氏は次のように述べています。「王安石の新学は、『周礼』を中核に据えて、統治制度を重視する政治思想をもつていた。治民のためには確固とした組織が必要だという考え方である。これに對抗して登場した程頤の道学（理学）は、修己治人という考え方に立ち、為政者自身の人格陶冶と民衆への風俗強化を重視した。その拠り所となつたのが、『礼記』大学篇の三綱領八条目である。統治制度を重んじる周礼型と、修養教化を重んじる大学型は、宋代に顕著な二つの政治思想の型といふことができる」と。朱子が大学型なのはいふまでもありません。

三 朝鮮王朝における政治と思想

朝鮮王朝といつても、それは一三九二年から一九一〇年までは五百年にわたるわけで、その間中国では明清交替があり、日本では室町時代から戦国時代を経て、徳川・明治にまでいたる長い時代です。この長い時代をどういふふうに取り扱うかは、たいへん難しいことです。

さて、ここで若干近世日本の徳川時代と対比させて、その輪郭をつかみましょう。近世日本の場合には武士による政治体制ですが、朝鮮は両班が支配する体制です。つまり科挙を通つた儒学者官僚たちが政治を担う体制です。当然、政治と思想はべつたり癒着していました。それに対して日本の場合には政治と思想が分離していて、儒者といわれる人々は、林家や新井白石などの一部の例外的な存在をのぞいては、ほとんど政治に携わることはありませんでした。反面、思想が政治とかけ離れていたのも、むしろ思想は政治権力に縛られず、その内容は多様性に富んでいました。逆に朝鮮の場合には、

朱子は北宋以来の新儒学を集大成した人で、彼は王安石流の政治論を「覇」「覇術」とみなし、そのような政治は俗を乱すだけだと主張しました。結局のところ王安石の改革が失敗に終わったのは、朱子にとつては検証済みでした。つまり、朱子の「大学型」政治論は、王安石流の「周礼型」政治論の結末を見極めた上での主張だったわけでありまう。

通常、朱子学は秩序維持のためのイデオロギーとしてみなされがちですが、もちろんそういう側面がないとはいへませんが、明らかに朱子の政治思想の本領は理念性にあります。その理念性とイデオロギー的な側面との緊張関係があつたからこそ、朱子学は長い間、東アジアにおいて主たる思想として君臨してきたわけでありまう。冒頭で述べた「衝突」論は朱子学を東アジアの停滞性の象徴として扱いましたが、それは短見だと思ひます。朱子学は理念性、あるいは「向上性」をもつており、その側面に光を当てるべきだと私は思ひます。次は、そのような朱子学が朝鮮王朝においていかなる姿をみせたのかについてお話しします。

思想が権力闘争に絡んでいたこともあつて、いったん朱子学が正統思想として定着すると、他の思想は異端視されてしまい、朱子学一色となりました。そのため、日本の多様性に比べるとつまらない感じがします。

では、そのような朝鮮の政治と思想をいかに研究するか、方法的なものを考えてみましょう。今までの研究は大きく分けて二つの系統に属しています。一つは史学系統の政治史で、もう一つは哲学系統の儒学史です。しかし両者にまたがる研究は多くありません。ですから私は、現実の権力と思想との関わりの中で思想を読みとる方法が必要だと思ひます。強いていへば、政治史と哲学史、あるいは権力闘争と理念闘争との接点を見出すことです。

方法論としてもう一点お話ししますと、「経典」「政策」「見解」という三つの側面からの総合的な研究です。例えば、一人の人物、特に彼が儒学者の場合、彼の政治思想を究明するには三つの通路があつて、一つ目は経典を媒介することです。彼が経典をどのように受容・理解・解釈したのかを通して、彼の思想の特徴を

明らかにすることです。二つ目は、彼が提示した具体的な政策が何だったのかを考察することです。三つ目は、多様な対象、つまり事実・事件・状況・人物などに対して彼が示した見解から、それは書簡や詩文でもよいし、建白書でもよいですが、それらのものから政治思想を読みとることです。一人の人物の実像に迫るためには、この三つの方法を総合的に駆使して、それらの相互関係を立体的に照明すべきだと思います。この観点からみますと、おそらく日本の思想史研究は、どちらかというと、經典解釈のほうが主なものになっていると私は思われます。

次の問題は時期区分です。朝鮮は五百年にわたりますので、その政治と思想を研究する上で、時期区分は欠かせません。詳しい内容は省きますが、私は修士論文で以上のような方法論を持って、建国期を考察しました。それを次にお話しします。

四 建国期における政治と思想

この時期に活躍した最も重要な人物は鄭夢周・鄭道

伝・李芳遠、そして権近でした。彼らはみな朱子学者であり、官僚でした。この中で李芳遠は朝鮮王朝の三代目の王になる人物です。

本論に入る前に、まず四つのポイントを念頭に置いていただきたいと思います。一つ目が中興と革命、二つ目が隠遁と出仕、三つ目が制度と修養、四つ目が功利と理念です。建国期の政治史の中でこの四つの思想問題を読みとることを試みたいからです。この時期の政治の動きは、日本の戦後の政党政治とは比較にならないほど目まぐるしい展開をみせます。それも短期間に。そして命懸けの政治闘争・権力闘争を伴っていました。だいたい一三八八年から九二年までの四年間なのですが、政治史だけを説明するのも大変なので、要点だけを絞って説明します。

朝鮮王朝の前が高麗王朝ですけれども、高麗王朝の後半には蒙古からの侵略があり、高麗は四十年ぐらい抵抗しましたが、結局降伏して元朝の下に入ります。その後、一二九〇年に元朝から朱子学を受容するわけです。

最初に朱子学を受容したのは安珦という人物で、その後白頤正・権溥・禹倬・李齊賢・李穀・李穡・鄭夢周・鄭道伝・李崇仁・権近などの人たちによって継承されていきます。特に元朝は朱子学を科挙の科目として定めますけれども、高麗もそれに倣って科挙の科目を変更し、それ以後朱子学は高麗・朝鮮の官学となります。

一三五一年には恭愍王が即位するわけですが、彼は辛旽という僧侶を登用して改革に乗り出します。その改革の中で重要なものが李穡と関わりますけれども、彼は成均館、儒学における大学みたいなものですが、そのトップである成均大司成となり、成均館を立て直します。そこで研鑽されたのが朱子学です。先ほど申しました鄭夢周・鄭道伝・権近、それから金九容などの人々が朱子学を講論し、後に彼らが新しい政治勢力として政治の舞台に登場するわけであります。

その間、中国大陸では一三八八年に元から明への王朝交替があり、改革を進めてきた恭愍王が殺害され、七四年に当時十歳だった辛禔が王位を継承しますが、

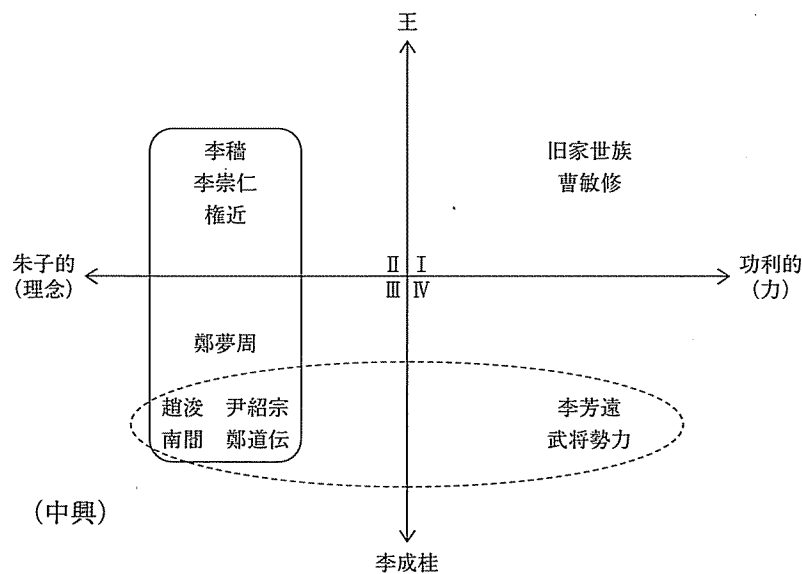
実権は彼を擁立した近臣に握られていました。結局改革は挫折し、その後の政治は反動期に入ります。一三八八年に大陸を平定した明は高麗に対して領土問題を突きつけ、それに従いたくなかった高麗は戦争を始めるわけですが、今の中国と北朝鮮との国境である鴨緑江まで至った李成桂が軍を戻し、都の開城に戻ってきて、王と近臣を追い出しました。その事件が威化島回軍ですが、この事件から高麗王朝は最後の段階を迎えます。

回軍があつた一三八八年から高麗が滅亡する九二年までは四年間ですけれども、この時期をいかにみるべきかについて、私は既存の定説らしいものに異議を唱えました。つまり今までは一三八八年の時点すでに革命は始まり、高麗王朝の滅亡は必然だったというふうにみてきました。しかしそれは実状ではないと私は考えます。この四年間がひたすら王朝交替に向けて一直線に走ったわけではなく、いろいろな選択肢があつて、試行錯誤の過程の中で、結果として革命による王朝交替が行われた、というふうにみるべきだと私は考

えます。「革命」よりはむしろ「中興」のほうが当時を説明する上で欠かせません。つまり高麗王朝の転覆よりはそれの立て直しにより重点が置かれていたとみるべきです。その話をこれからいたします。

中興、つまり高麗王朝の立て直しには二つの側面がありました。それは制度の面と修養の面です。先ほど朱子学の政治思想で申し上げた「政」と「教」がまさにそれに相当します。つまり制度を立て直すことと、君主の心を修めることの二つの路線なのです。当時においてはこの二つの路線が並行していました。制度の側面の中で最も重要だったのが土地問題でした。高麗王朝は貴族社会だったので、貴族が大莊園を所有していました。それを改革しない限り国を立て直すことはできないというのが、そこでの基本的な考えです。先ほど、恭愍王の改革で成均館を中心に朱子学を勉強する集団が現れたと申しましたが、彼らが回軍以降政治的な力を伸ばして、この土地制度の改革を主張したわけでありました。ところが土地改革をめぐり賛否両論が出て、一三八九年に新勢力は分かれます。当時の権力

図①



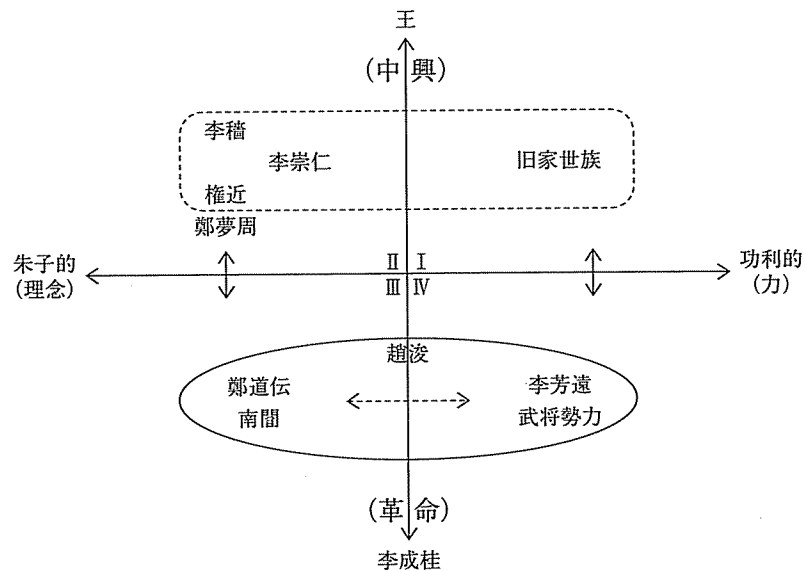
闘争を分かりやすく説明するためにつくったのが四つの図ですけれども、まず、図①は回軍があつた直後の政局を表します。横の軸は右側が功利的、つまり力に頼って功績を挙げることに傾いている側面です。左側が朱子的、つまり朱子学の理念性に従ってそれを実現しようとする側面です。縦の軸ですけれども、上の王は高麗の王で、高麗王朝の維持に加担している側面です。そして下の李成桂は後に朝鮮王朝の太祖になる人物ですけれども、高麗王朝を変えていく側面を表します。このような二つの軸を交差してみると、当時の政治勢力が四つのグループに分けられます。Ⅰは高麗王朝における既得権を有する勢力で、土地や莊園をもつて、これまで権力を掌握してきた集団です。ⅡとⅢは先ほど申しましたように、朱子学を研鑽し、科挙に及第し、中央政界に登場した人物たちで、彼らは朱子学をもって高麗王朝を立て直そうとしたグループです。

Ⅳは武将である李成桂と運命をともしながら戦場を勝ち抜けた、朱子学とは無縁な武將勢力です。回軍後の政局はこの四つのグループの駆け引きによって運営

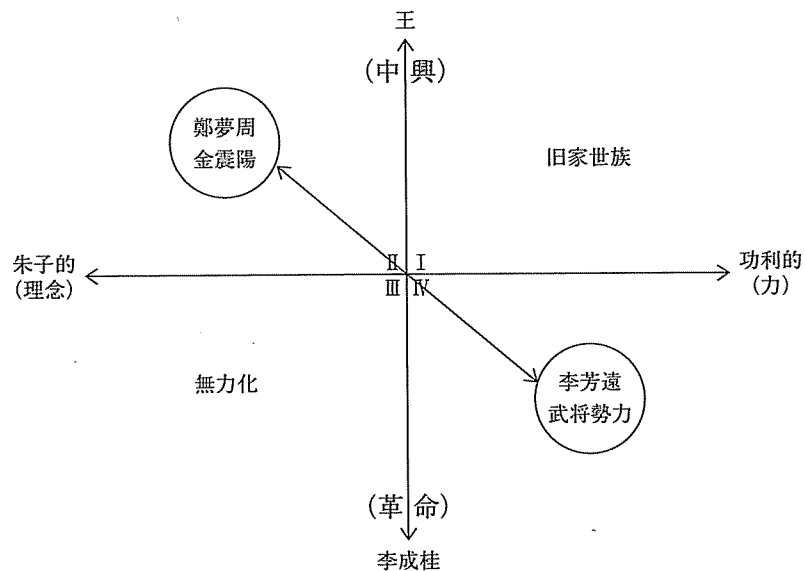
されていたわけですが、そこで中興というのは、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳが力を合わせてⅠを倒すことを意味します。ⅡとⅢはもともと共に成長してきた朱子学者たちでしたが、土地改革をめぐって分裂します。

その事態に基づいて作ったのが図②です。Ⅱは土地改革に消極的な立場をとる人々で、Ⅲは積極的でした。なぜ意見が分かれたのかについては、いくつかの説がありますけれども、今日は省きます。その中でひときわ目立つのが鄭夢周という人物です。彼はどっちつかずで、真ん中でうろちっています。後にこの人物が決定的な役割を演じます。Ⅲは一方で、李成桂の武力と中興という名分に支えられながら、土地改革を進めていきましたが、他方で思わぬⅡの反発に直面し、その打開策を講じなければなりません。そこで彼らは回軍後に立てられた辛昌王を引き下ろし、自分たちの意のままに動いてくれる新たな王を立てることにしました。それが高麗王朝の最後の王である恭讓王です。ⅢとⅣは恭讓王を操ってⅠとⅡを殲滅させようとした。ところが鄭夢周がその企図にブレーキを

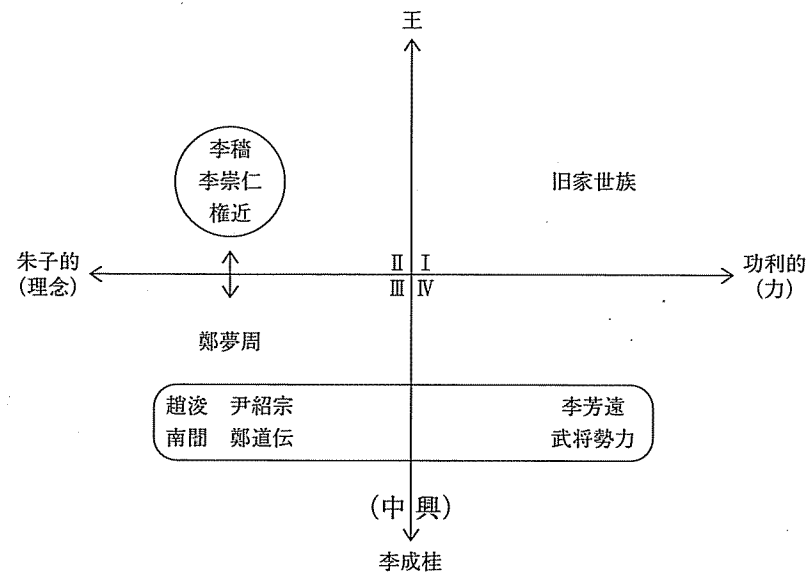
図③



図④

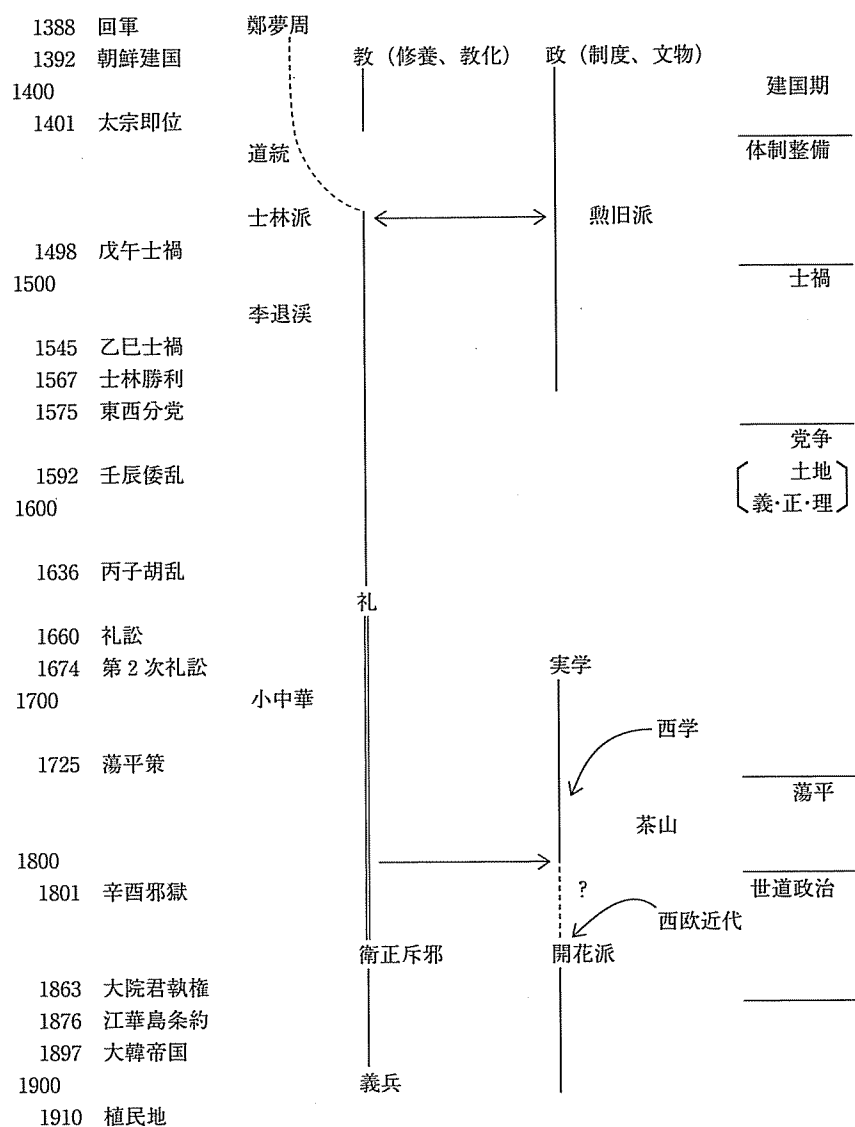


図②



かけました。おそらく敵対している政局をまるく収めようとしたのでしょう。このような彼の調停もありまして、政局はなかなか動かず、膠着状態に陥りました。その間にも土地改革は進められ、一三九〇年に昔の土地制度がなくなります。これによってIのグループは大きな打撃をうけるのです。とはいっても、結局IとIIを倒す企図は失敗します。ここに至ってはじめて中興の策をあきらめ、革命に戦略を変換したわけであります。一三九一年初頭のこと、王朝交替の一年程前になります。詳しい内容は省かざるをえないのですけれども、ここで主役を演じたのが鄭道伝でした。戦略の転換云々は主に彼の思想と行動を分析して、當時を解釈したわけであります。それはともかく、IIIとIVは高麗王朝を倒すために命懸けの闘争を繰り広げましたが、またもや鄭夢周の調停が功を奏して、同年十二月に連立政権が誕生します。このような状況の中で、李成桂が落馬し、けがをすると、鄭夢周がそのチャンスを見逃さず、IIIのグループを中央世界から追い出してしまいました。

資料②



ここで図③と図④をみながら、もう一度整理します。

ⅢとⅣが革命に転換したことで、ⅠとⅡは中興を貫くことになります。この革命と中興の対決を孕んでいる連立政権の状況で、李成桂の身体に異常が生じるや、鄭夢周がⅢを無力化することによって、図④が示すように、ⅣはⅢという朱子学者官僚、つまり代弁者を失ってしまいます。もはや革命の戦略がくじけ、高麗王朝の持続に傾けようとしたところです。ここで李成桂の子息、李芳遠が鄭夢周を暗殺し、政局を一変させます。ここから一三九二年の王朝交替までは一直線で進められたわけであります。以上のような過程を一三八八年の時点から革命の視点に立って説明するのは誤りです。李成桂が新王朝の王に推戴され、太祖になりますけれども、ここではじめて革命という言葉が公に使われるようになります。それに至るまでの歴史書の記述には一言も「革命」という言葉が出ていません。「中興」のみで埋め尽くされています。

ここで一人の人物に注目したいと思います。この節の冒頭であげた重要人物の中の一人、権近です。彼は

Ⅱに属し、いち早くⅢから弾劾をうけて、地方にとどまりながら中央政局の推移を見極めていました。あくまでも中興の立場を維持してきました。ところが、王朝が交替してから李成桂が彼を呼び出します。ここで隠遁すべきかそれとも出仕するか、という思想の問題が生じます。今日の報告の冒頭で、念頭に置いていた四つのポイントの一つです。実は彼以外にも数多くの人々が王朝交替の際に、この問題に直面しました。それはともかく、最後まで中興の路線を維持したにもかかわらず、彼は李成桂の呼び出しに応じて、出仕します。一言でいって、変節したわけです。

建国後の新王朝はそれにふさわしい典章制度や文物を創設しつつ、新王朝としての基盤を固めていきました。ところで、王朝が誕生してから約六年がたった一三九八年に王子の乱が起きます。その乱の原因は建国直後の世子の選定にありました。当時世子として定められたのは李成桂の末子である芳碩でした。それに不満をもっていた李芳遠がクーデターを起こして世子と鄭道伝などの近臣を殺害し、またもや政局を一変させ

たわけです。それから二年後に二回目の王子の乱が起こり、それを乗り切った李芳遠がようやく、朝鮮王朝の三代目の太宗となりました。王子の乱以後、権力の権化ともいえる李芳遠の篡奪過程を朱子学によって正当化したのが、先ほどの変節者、権近でした。権力のために手段を選ばない李芳遠、それを朱子学で正当化した権近。私欲をむさぼって功利を追求した李芳遠、朱子学の理念性を曲げて、現実の権力のために装飾した権近。二人のコンビで行われた政治は、「教」ではなく、「政」であったことはいまでもありません。もはや朱子学の精神は姿を消し、ここで朱子学の受容の第一幕は終わったわけがあります。

このように建国期における政治と思想のドラマは朱子学の理念と権力欲が絡み合いながら演じられました。そして朱子学に傷跡を残したまま、朝鮮王朝は続くわけがあります。

五 その後の流れ

その後朝鮮王朝は五百年間続くわけですが、建国期

に現れた政治と思想の関係がどのように展開されたのかをざっと眺めてみたいと思います。ここでは資料②にそって説明します。

一三八八年に回軍があり、一三九二年には朝鮮王朝が誕生しました。ここで、前に申し上げた朱子学における「政」と「教」について想起していただきたいのですが、まさに新王朝は「政」と「教」を並行させながら、国づくりを進めていきました。ところが一四〇一年に李芳遠が即位します。三代目の太宗ですけれども、先ほど申しましたように、彼が即位するまでの過程は暴力による篡奪でした。そこで「教」の流れが断たれ、主に「政」による政治が行われるようになります。体制の整備、つまり刑罰や軍事制、官僚制などのさまざまな制度が創設される時期が続きます。だいたい五、六十年ぐらい経ちます。

一方、権力闘争に敗れた人々、特に建国期において高麗王朝に忠誠を尽くした人たちは地方に追い出されたり、隠遁したりしたわけですが、彼らは朱子学をもって再武装し、今の政治は朱子学に従っていない

いと主張し、政権に対抗するようになります。自分たちが朱子学の本領を継承しているという意識をもって歴史の舞台に現れたわけです。これが「士林派」と呼ばれる人々ですが、太宗以来の「勲旧派」官僚の「政」の路線に反対し、「教」の路線を打ち立てました。その際、彼らは高麗王朝と運命を共にした、その意味で朱子学の正統性を継承した鄭夢周を自分たちが継承するのだという名分を立てて、権力闘争に乗り出したわけです。

もちろん権力闘争とはいっても、それは暴力によるのではなく、科挙制度がすでに整備されていたので、科挙を通じて中央政界に進入し、既存の勢力と対抗するわけです。士林派は地方で勉強し科挙を通過し官僚になって、トップクラスの政治家たちを今の政治は駄目だと批判し、朱子学の教えに従って政治をすべきだと主張しました。この対立がかなり長引きます。ところで、権力を握っている側は彼らの動きがけしからんと思いましたから、政界は弾圧の嵐に覆われました。士林派は四回にわたって弾圧を受けますが、それが

「土禍」と呼ばれる事件です。長い間続けられた権力闘争の中で、朝鮮で最も有名な朱子学者である李退溪という人物が現れます。

ついに一五六七年に士林派に軍配が上がり、彼らが中央政治を担うようになります。ところがそれで全て決着がつけられたわけではありません。自分たちが正しいのだと主張して、政権を取ったわけですが、こんどは自分たちの間でどっちが政権を取るべきなのか、というのが懸案になります。「党争」の時代の幕開けです。党争とは何かというと、正しいもの、つまり世の中には「理」というものがあることを信じる人々が党派を作って権力を取るために闘うことです。しかし「理」は抽象的・原理的なもので、具体的にそれが何かについては決めがたいものです。だからその闘いは決着がつきにくく、理念闘争と権力闘争が絡み合いながら延々と繰り返されるわけがあります。

士林派が権力を取り、党争が始まったところで、朝鮮は隣国との戦争に巻き込まれます。一五九二年には壬辰倭乱、つまり豊臣秀吉による慶長の役が起こり、

一六三六年には満州族による侵略——思想・精神的にはこちらのほうがより大きな打撃を与えますけれども——を受けて、朝鮮社会は今までつくり上げてきたものがガタガタになってしまいました。それをどういうふうに立て直すかが、その後政権を担うものが直面した課題でした。

そこでもやはり二つの路線がありました。一つは「教」の路線であり、もう一つは「政」の路線であります。もちろんこの時期にはじめて現れたわけではなく、以前からの延長線にあるのにすぐお気づきでしょう。ここで注目したいのは、「教」の路線において「礼」が重要視されたことです。礼をもって風俗を正すという思考です。「礼」をもって、戦乱によって乱れた社会を立て直すとしたわけであります。一方「政」の路線は制度・文物を整備するか、あるいは生産力を向上させることによって、社会再建を図ったわけであります。この路線が通常「実学」と呼ばれるもので、朝鮮後期を研究する上で最も重要なテーマであります。

それはともかく、資料②の図で、「礼」のラインが二

重になっているように、当時においては「教」の路線が政権を担う反面、「政」の路線はそれほど大きな力を発揮したわけではありません。そう言った要因の一つには、「小中華」という思想とそれによる政策も考えられます。もともと明朝を滅ぼして清朝を立てたのは夷狄である満州族でした。そこで朝鮮は、中華文明を担っているのはもはや自分しかない意識しました。特に朱子学の「道統」を継承したのは朝鮮であると唱えたわけですね。それが「小中華」の思想でありまして、その名分の下で清朝を倒そうとした北伐のための政策が行われました。

ここで、一六七四年に起こった「礼訟」について考えてみたいと思います。党派ですけれども、一五七五年に東西に分かれたのがその始まりでした。その後枝分かれしながら権力闘争が繰り返られるのですが、その中での一つが礼訟で、それは服喪をめぐる起こった権力闘争です。一六七四年の「礼訟」ですが、孝宗の妃が死ぬと、仁祖の妃が服喪をどうすべきかをめぐって論争が起こり、経典や礼書を引証しながら、西

人は八カ月が正しいと、南人は満一年が正しいと、それぞれ主張し、結局西人が敗れ、政権は南人のほうに移りました。しかし何年後かにはまた別の件で巻き返しが図られ、またもや政権が替わる、そういう闘争を繰り返したわけであります。それをみると、確かに前近代で、東アジアにおける停滞性、つまり発展性のない、ただ戦うための戦いではなかったのか、というふうにいわれがちなのですが、果たしてそうでしょうか。時間がないのでこれ以上は深入りできませんが、ただ、それは一つの政治システムであつたことだけをいっておきます。

資料②に戻りますけれども、このように一七〇〇年代を通して「礼」の路線が主流でありましたが、十九世紀に入ると西洋の勢力が朝鮮にも迫ってきて、開花派が生まれるわけです。しかし彼らには歴史を動かす力はありませんでした。どちらかというと、「衛正斥邪」、つまりこの場合、「正」が朱子学で、「邪」が西洋のものですが、こちらのほうが遙かに強い力を発揮しました。結局さまざまな勢力の努力にもかかわらず、一九

一〇年に至り、朝鮮王朝は日本の植民地になって、その終焉を迎えました。

以上のような朝鮮の流れを眺めて気づくのは、日本の場合は「実学」的な側面がより強かったのではないかと思います。それが西洋とぶつかったときに日本が円滑に近代化できたひとつの要因だったと私は思います。それはともかく、朝鮮王朝五百年の政治と思想を朱子学のエートスがいかに規定したのかをみたわけであります。

結び

最後になりますが、いくつかの課題を整理して終わりにしたいと思います。まず、朱子学のエートスはこのように朝鮮王朝を規定したわけですが、果たして朝鮮のケースが「東アジア」においてどのように位置づけられるか。中国や日本はどうだったのかを比較しなければならぬと思います。それから冒頭でお話した「東アジア」という視点ですけれども、「東アジア」

はこれから間違いない続きます。そこで「衝突」ではなく、「融合」という視点に立って、これまでみてきた五百年の朝鮮を見直すところのようなものが出てくるか。これから研究していきたいと思います。

(ぱくほんきゅ／日本学術振興会外国人特別研究員)

(本稿は、二〇〇一年四月二十六日に行われた研究会での報告内容に、加筆いただいたものです。)